

## 夏の沢旅 谷川編②～南カドナミ沢はヤブだらけ～

【報告者】H田

【日時】2019年8月11日 【天候】くもり

【参加者】H田ほか 会員外2名（リーダー、Fさん）

### 《コースタイム》

6:42 入溪地点→11:10 荒沢山→登山道（カドナミ尾根）→13:05 入溪地点

### 《 報 告 》

美しい景色だけが、キラキラと忘れ難い沢の記憶として残るとは限らない。そんな沢があった。

二日目。それは、初日の夜の親睦会(呑)、ラストナイトに行く焚火(呑)の間にある。というわけで、短くて楽な沢を選んだ、はずだった。図書「東北・上信越・日本アルプス 沢登り名溪 62 選」によると、滝登攀グレード「2級上」、総合グレード「初級」とある。

入溪地点まで、キャンプ地から車で移動する。ここかな、という地点で沢らしきものは見えたが、思わず通り過ぎる。「え？今の？」「まさか、ね？」…でも、そこしかない。

「ヤブだね…」遡行図を見ると、この入溪地点に戻る登山道もあるはずなのだが、それすらも分からない。とにかく、一面の藪…。一同、テンションが下がるが、ここまで来てしまったので仕方がない。しばらく眺めた後、意を決して藪沢入口に潜り込んだ。

しばらくは、身を屈め、クモの巣を払い、枝を分けたり引っかかったりしながら、藪沢のゴロを歩く。デジカメを出しても全く絵にならない(笑)。しばらくすると、滝が現れはじめる。フリクションが効くナメ滝や、効かずに草を掴みながらでないと登れない滝、左岸から右岸へトラバースしながら登る滝など、登攀的には楽しい沢だが、なかなか藪が切れない(笑)。連瀑帯を過ぎ、傾斜が少し緩やかになった所で、いきなり藪が開けた。壊れたスノーブリッジが姿を現す。近づくとともにはっきり感じられる冷気が心地よく、離れ難い。少し休憩して、終盤へ突入する。

その先は二俣に分かれていて、左俣へ進む。少し行くと再び藪になった。水量が少なくなるにつれて、傾斜はきつくなる。沢筋は泥が乗ったスラブで、ラバーの沢靴でも滑って登れない。左岸側の藪に入り、ひたすら藪漕ぎながら登るしかない状況になった。滑りやすさに手こずる滝も出て来たが、藪が濃過ぎて、途中からロープを出せる状況でもないの、とにかく藪にしがみついてジワジワ登るしかない。

少し視界が開けた所で、目指す荒沢山の稜線を確認出来たが、傾斜はかなりきつく崖にしか見えなかった。その後はもう必死で、木の幹を掴み、根曲竹を束にしてたぐり寄せ、かき分け、踏み締めながら、ただただ1歩ずつ登る。背丈より長い根曲竹は、丈夫なので掴めば安心なのだが、乗り越すために踏むと滑りやすく、なかなか前に進めない。それでもなんとか、小一時間くらい格闘した後、青空が近づき、最後はツツジとシャクナゲをかき分けて、稜線に上がることが出来た。荒沢山のピークには、10分ほどで着いた。振り返って見えた自分たちのルートは、やはりどうみても崖でしかなかった。

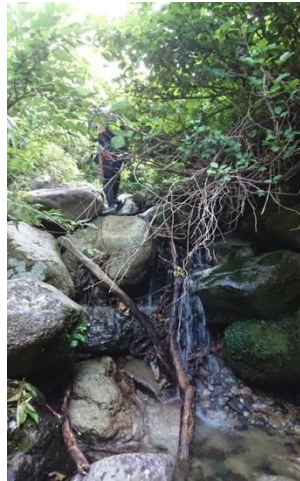
「(リーダー) これ、もうアルパインじゃね?」「(わたし) いや、ヤブパイン?」「(Fさん) う～ん…」。  
なんておバカな会話で振り返る。山頂は暑くて休憩できる感じじゃなかつたので、少し降りて休もうと下山路であるカドナミ尾根を見つけて降り始めた。はじめから危惧していたことだが、踏み跡はあるもの人がほとんど歩いていないのか、ここも概ね藪化していた。

美しい沢の記憶は、ほぼほぼ強烈な藪の印象に上書きされる。再び登りたいかと聞かれると、悩みますが、忘れられない沢のひとつになった。その日の焚火ナイトは、この藪沢を酒肴に盛り上がったとい

うのは、言うまでもないお話(笑)。



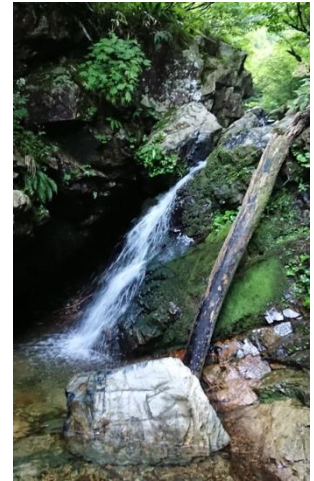
入溪地点



藪沢逆行



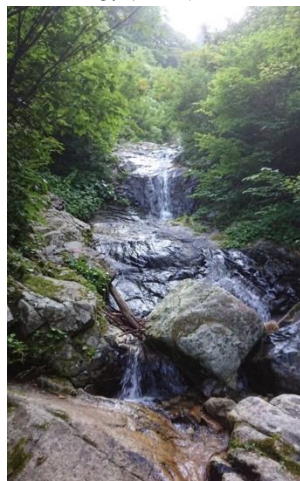
ナメ滝



4m滝



ナメ滝。左岸から巻く



意外とナメが多い



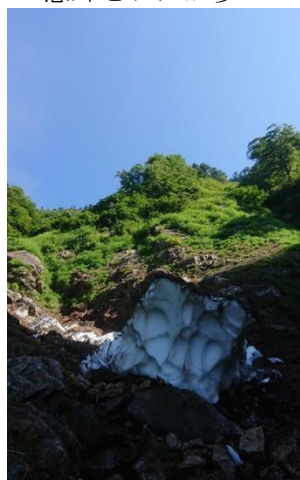
7m滝



多段10m



雪溪が見える



壊れたスノーブリッジ



荒沢山



この辺をヤブパイン